

# 両ダンゴの底釣り

## 最近の傾向

底釣りは「一にタナ、二にエサ」といわれる。特にこれからの季節は、魚に活性が出てくるので底に魚を安定させて釣っていくのが難しい。しかし方法がないわけではない。釣り人側のセッティングによってもかなりの違いがあるので、ということ。つまり、底だから」という考えは大切だが、その日、その時によって柔軟に釣りたい。特にエサやタナに

ついてはしっかりとした基本とさらに応用が必要だ。

基本は上バリトントン。実際にエサを打ち込む近くのタナを測ろう。そのためにロッドをあまりながらタナを測っている姿をよく見るはずだ。

ウキの選択だが、定期的には大きめのものを選択している。トップはパイプでもPCでもどちらでもよいが、使い慣れたウキを選ぶ。100回釣りして使ったから慣れているということではない。

### 仕掛け図

竿 8~21尺

ミチイト  
0.6~0.8号

ウキ ボディー  
13~20cm

板オモリ2点付け

ハリス 0.4~0.5号  
上=30cm  
下=35cm

ハリ 上下とも  
4~6号



つまり、「このウキならこのエサで上バリトントンなら何目盛入るはず」ということが自分で分かっていることが使い慣れたウキということだ。

食ってくるタナを見つけていくのが底釣りのポイント。つまり、どれだけ底にエサを安定させるか。これが「何センチずらし」ということになるのだ。

入れてもう一度、タナ取りから復習していこう。安定感から考えても楽しめる釣り方なのでしっかりと覚えて欲しい。また、ウワズリが特に気になる釣り方だが、エサの大きさや、ハリスの長さ、ハリのおおきさ、ウキの大きさ、エサのタツチ、開き、重さ、ネバリなど、広く探れる釣りである。大事なのは、基本に忠実にということである。

## パターン 1

推薦釣り場 = 管理釣り場

ダンゴの底釣り冬100cc +  
水100cc +  
マッハ100cc強(山盛り)



+



+



エサの大きさ &  
オモリ量



エサのサイズ  
直径10~6mm  
くらいの大きさ  
にしていけないにハ  
リ付けして打っ  
ていく

板オモリ

実寸大

板オモリ

実寸大

オモリの量 サオ16尺ならボディ  
18cmで、0.25mm厚の板オモリで  
1.7cm x 2cmを2点付け。

### ●エサ使いのコツ

比較的軽めのブレンドパターン。底に変化のあるポイントや、ヘッドロ、草などや藻などがあるところよく使う。また、水深が浅い池や食い渋りなどにも効果的なパターンだ。竿も16尺ラインぐらいまでの水深が目安。タッチは手水で調節していく、多少押し繰り返りでエサを合わせていく。特に冬~春先、秋~冬に使うことが多い。

作り方は「ダンゴの底釣り冬」に水を加え、5分ぐらい放

置する。そこへ「バラケマッハ」を入れてサラッとかき回す。あまりしつこくかき混ぜるとベタツキが出るので注意。もしネバリすぎた場合は手水を打ち、「バラケマッハ」を少し足していき。エサを大きく付けていくのではなく、狙ったポイントへ小エサを打ちベースを作る。

特にこれからの時期は魚の活性があるため、打ち始めは釣りやすいが時間と共に釣りづらくなることも多い。そのときはパターンを変えてみよう。食い渋り時には、エサを小さく付けるのがコツだ。

## パターン 2

推薦釣り場 = 管理釣り場

ダンゴの底釣り夏100cc +  
ダンゴの底釣り冬100cc + マッハ100cc + 水130cc



+



+



+



### ●エサ使いのコツ

通年有効なパターン。エサ打ち、エサの開き、そして集魚効果ともにベストブレンドといえる。水深21尺以上までエサはしっかりと持ってくれる安心感がなによりうれしい。特に気をつけることは魚のウワズリ。エサ持ちがよいため空振りが目立つと魚が上調子となることが多いので注意。このようときはエサを小さくつけることで対応。

作り方は、エサをすべてボウルに入れ、水を加える。多少多めにかき回すと、弾力が出るエサになる。魚の寄りが悪いときは手水を打ち「鬼バラ」や「バラケマッハ」を追い足していくことでその問題はOKだ。ただし入れすぎたとかの感覚は、釣り人の考えではなく、打ってウキの動きが出るまで追い足していくこと。意外と気付かない点だ。エサは小さめのものを打ち返すことで寄せをキープしていこう。

## パターン 3

推薦釣り場=釣り堀、管理釣り場

ペレ道100cc + ダンゴの底釣り夏100cc +  
ダンゴの底釣り冬100cc + 水150cc



+



+



+



### ● エサ使いのコツ

重さがあり魚を底に安定させて釣っていけるエサ。特に流れや水深が十分にある池などに良いパターン。ウキのなじみと戻りがはっきり分かるエサだ。夏場や秋口にはよく使うパターンで、例会、大会でも結果が出ている。エサ付けが苦手な釣り人も安心して打っていけるタッチに仕上がリ、付けやすく、割れ落ちも少ない。

エサと水をいっぺんに入れて作るパターンだが、エサの開きが悪くウキの戻しが悪いときには手水を打って「バラケマツハ」で調節する。このときは硬めに作り、ウキを見ながら手水で調節していく方法がベスト。エサ付けは、多少大きめに付けてなじみ幅をキープして釣っていきこう。なじみ途中のサワリが少ないときやアタリが少なく「バラケマツハ」を足してもダメなときはパターンを変えて攻めていく。

### 3

#### アタリの取り方は...

さまざまなウキの動きの中から、食いアタリだけに絞っていくことはかなり困難。何回もの空振りを繰り返しながら見つけていくのが普通だ。まずはなじみ途中のサワリ、これがしっかり出ていること。なじみ途中でサワリが出ないときにはエサを角バラせたり変化をつけよう。

そしてなじんだウキがゆっくり1目盛、もしくは半目盛ずつ上がってくるように心掛けよう。そして小さくても鋭いチク、ツンと入るアタリを合わせていく。ウキに弱い上下のサワリなどが出ていて、その動きが止まってからのアタリはヒット率がいい。鋭く入るアタリやモヤ、モノといった動きも、ウキが上がったらどンドンアワせていきこう。

### 両ダンゴの底釣りこんな時どおする?

### 2

#### ズラシ幅の考え方は?

タナは、カラバリの状態で上バリトントンがスタート。これでエサを通常通り付けてタナを取ったポイント近くに打つと一般的なウキなら2~3目盛は入るはず。もしなじみすぎか、なじまない状態なら上バリトントンが少々ズレていると考える。ウキのなじみ、戻しがあり、アタリが出ている場合、釣ればしばらくはそのタナで打ち続ける。しかしカラツンなら、エサをもう少し安定させるためにタナをこの時期なら1cmずつ深くしていこう。これを何回も繰り返していきこう。

### 1

#### 竿の長さを決めるには?

平場、カケアガリなど、釣り場に着いたら、釣座の水深や底の状態をチェックしよう。それを頭に入れ、エサを打つ方向の底の状態を想像する。平日、混雑していないときは水深一杯の竿で釣る。振込みが苦手な場合、一尺長いサオを選ぼう。穂先とウキが近づきすぎても釣りづらい事と底が掘れた場合も考えてのことだ。カケアガリや底に変化が多い場所なら長めの竿を選ぼう。特に左右の変化が大きいところは規定一杯の長竿で釣ろう。打ち始めて変化が少なければ竿を短くしていく。竿の長さでアタリの量がちがうということもおぼえておこう。